東文易解

前編

文部省國語調査會補助委員
東京外國語學校教師
東京高等商業學校教師
大矢透 著
金國璞
張廷彦 同校

東文易解

前編

大日本東京
泰東同文局

明治三十五年七月二日印刷
明治三十五年七月五日發行
明治三十九年八月二十八日再版印刷
明治三十九年八月三十一日再版發行

〔東文易解前編奥付〕

著作者　東京市麻布區飯倉狸穴町五十八番地　大矢透

著作兼發行者　泰東同文局表代者　東京市日本橋區數寄屋町城邊河岸第二十二號地　藤山雷太

印刷者　東京市日本橋區兜町二番地　金澤求也

印刷所　東京市日本橋區兜町二番地　東京印刷株式會社

東文易解

凡例

一日東之與中華、固爲脣齒輔車之國矣、觀宇內之形勢、兩國宜相親相結、蓋莫急於今日也、而欲其相親相結、則莫先於意志之相通。意志之相通、則必藉語言爲之媒介。此吾所以有是書之著也。

一此書之成也、有如臨渴掘井見獸作矢、故無暇顧事之漏脫與冗沓、加之、作者淺陋、不嫻華文、叙述不能達其意者頗多。有如舉例、從座右所獲而用之、草率之間、取舍不得宜、不免駁糅蕪雜之毀者不少。欲待後日再刊之時、芟削補修、以有所贖也。讀者幸諒焉。

一古來、爲華人說讀東文之法者、蓋以此書爲首。故書中所用之品目稱謂、不典者居多。實出於不得已、讀者勿以杜撰見尤幸甚。

一本書、主讀法而非說文法者。故自文法視之、則有闕漏、有蛇足、識者幸諒焉。

著者誌

東文易解前編

目次

第一　文解　一
第二　字母　一
第三　靜動不貫句　五
第四　靜繫靜不貫句　六
第五　施受動相貫句　七
第六　施受動不貫句　九
第七　一施兩受致動句　十
第八　靜以靜致動句　十三
第九　靜同靜致動句　十四

第十　靜因靜致動句　十六
第十一　靜由靜致動句　十七
第十二　靜受靜致動句　十八
第十三　靜使靜致動句　二十一
第十四　時異句　二十二
第十五　動致動句　二十三
第十六　代靜句　二十五
第十七　繫靜句　二十七
第十八　輔動句　二十七
第十九　斷定句　三十三
第二十　疑問句　四十七

第二十一　希望句　四十九
第二十二　感歎句　五十一
第二十三　兩文語辭比較圖說

東文易解前編

泰東同文局協修　文部省國語調査會補助委員　大矢透　著
東京外國語學校教師　金國璞
東京高等商業學校教師　張廷彥　同校

第一　文解

東文之與華文異者、有三。曰字母、曰語尾變化、曰辭句之次序、惟此三者、爲華人所難解也。然古時、東文多用華字華語、且構文之法、亦率皆類華之古文、故華人欲知東文者、先須畧通此三者、而後按古文字句次序、上下轉倒、以尋其意、猶東人讀華文之法、則東文亦不甚爲難解也。但此三者中、如識字母、固不甚費力、而語尾變化與辭句之次序、則稍屬複

雜而非片時所能辨。故先宜平心靜氣、將字母習熟、而後逐本書編述之次第、徐々進步可也。

第二　字母

日東之字母、其數四十有八、以發固有之音、而或加之符號、或數母結合、則天下之聲音、無不畢具。錯綜聯綴之、則千言萬語、皆在是矣。

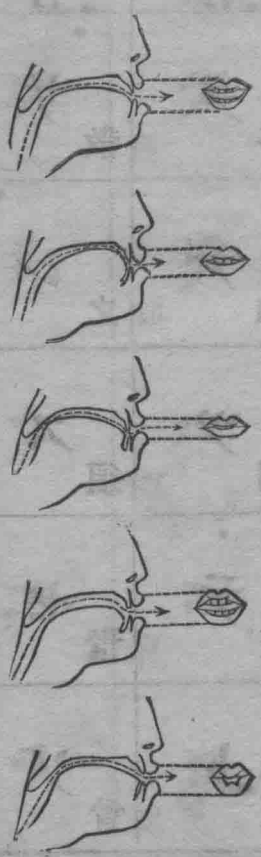
字母有眞草二體、原皆取於華字。一者取眞字偏旁、一者用極畧草字、而各假原字之首音、以定一音一聲也。

字母之排序、有二、曰以呂波歌、曰五十音、以呂波歌者、爲使兒童易於記誦、五十音者、或爲呼法之規矩、或爲語尾變化之準繩。併揭於此、欲學東文東語者、須先反覆記誦焉。

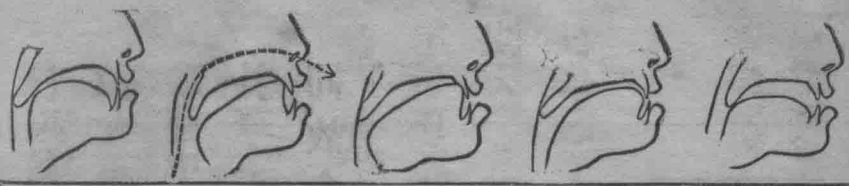
五十音圖

日東與中華、其聲音固不相同。故傳之、非面授口訣、究不能盡其妙。故今、畫各字母發音時之口形於圖上、與圖側、以標準之、故學者宜參驗圖中所記之呼法、而反覆呼之、當有所神會焉。日東之字母、原取原於華字、因其創造在千歲之上。故、當時所取之音、與今之音、迥然不同。故不足以示呼法。然、於字形之記臆、不無小補、故註於各字母之下。

ア行	
ア	阿
イ	伊
ウ	宇
エ	江
オ	於



口舌如圖側形而平直發喉音短呼之



カ行	サ行	タ行	ナ行	ハ行
カ 加	サ 散	タ 多	ナ 奈	ハ 半
キ 幾	シ 之	チ 知	ニ 仁	ヒ 比
ク 久	ス 須	ツ 川	ヌ 奴	フ 不
ケ 氣	セ 世	テ 天	ネ 禰	ヘ 邊
コ 己	ソ 曾	ト 止	ノ 乃	ホ 保

先舌根音相接道而次發口與固如鎖鐘挺圖上共側急圖發音口形

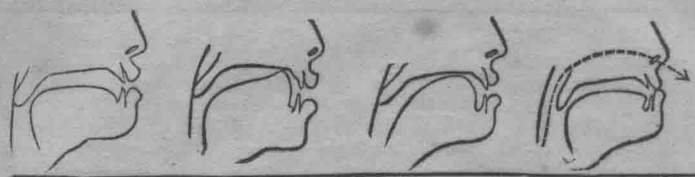
先舌頭以近於接加力上如息氣圖挺圖上共側急圖發音口形

先舌頭如密上圖挺接鎖音口與固如形共側

先舌頭如密接上圖挺鼻孔次上閉鼻孔變音口形如共側發圖音

先舌頭如密上圖挺道而次變音口與固如形共側急圖發

先舌根如上圖挺吊鐘力加氣息次加與口形如共側急圖發音



	ワ行	ラ行	ヤ行	マ行
アの韻	ワ 和	ラ 良	ヤ 也	マ 末
イの韻	井 井	リ 利	イ 伊	ミ 三
ウの韻	ウ 宇	ル 流	ユ 勇	ム 牟
エの韻	エ 慧	レ 礼	エ 江	メ 女
オの韻	ヲ 乎	ロ 呂	ヨ 與	モ 毛
	先如上圖微開兩脣一如發ウ音次與如側面變口形共發音	先如上圖舌尖微觸上挺顎加聲次與加側圖變口形共發音	先如上圖舌之前部接上顎次與如側圖變口形共發音	先如上圖兩脣次與開鼻孔如側圖變口形共發音

音音皆爲ア‖各長呼則

音音皆爲イ‖各長呼則

音音皆爲ウ‖各長呼則

音音皆爲エ‖各長呼則

音音皆爲オ‖各長呼則

附號字母

ガ行	ザ行	ダ行
ガ	ザ	ダ
ギ	ジ	ヂ
グ	ズ	ヅ
ゲ	ゼ	デ
ゴ	ゾ	ド

與振動喉內聲帶共發‖カ‖サタ各行音

バ行	バ
	ビ
	ブ
	ベ
	ボ
パ行	パ
	ピ
	プ
	ペ
	ポ

先合兩脣固鎖音道次與振動喉內聲帶共發ア行音

先合兩脣固鎖音道次急發ア行音

鼻音字母

ン

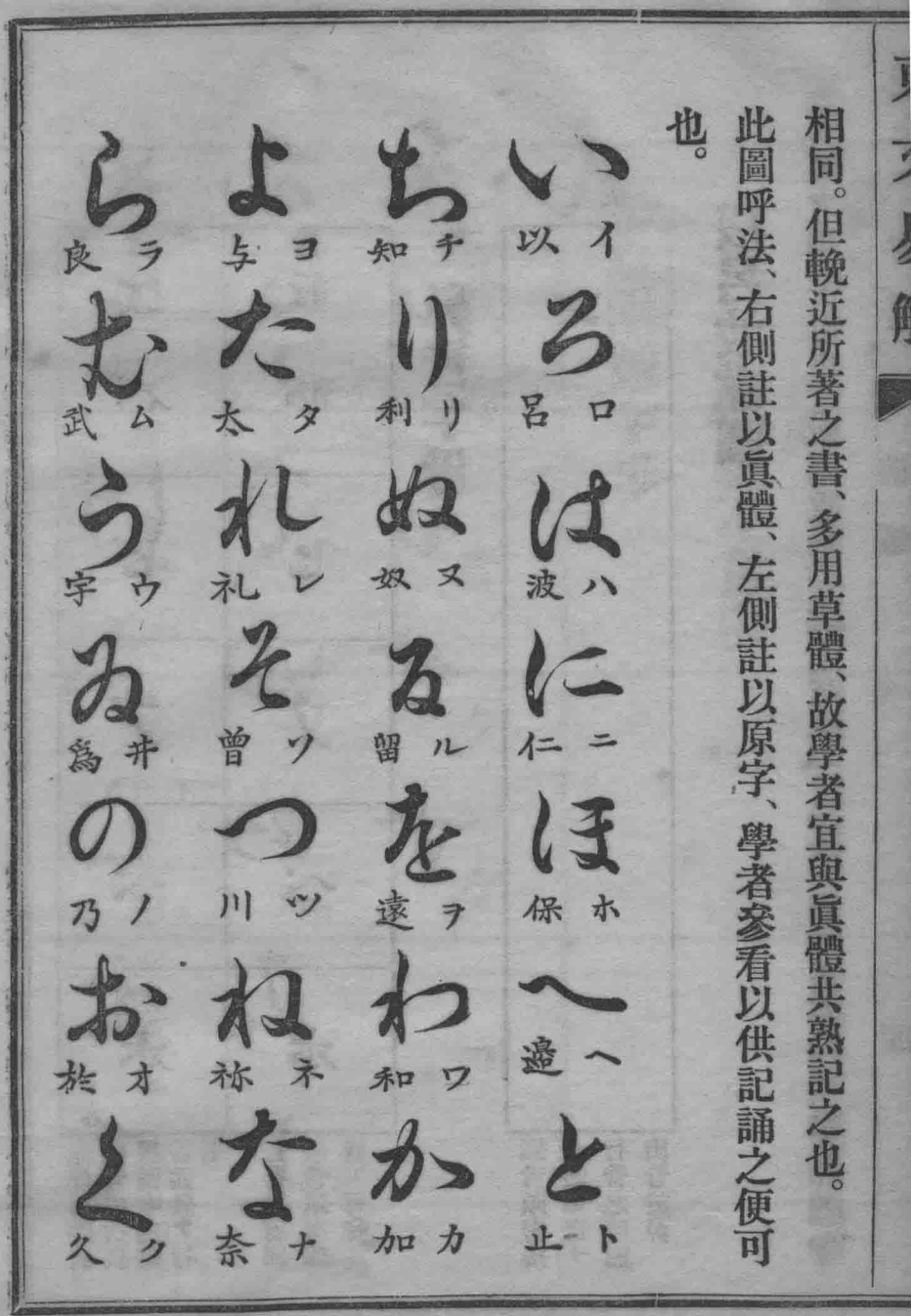
挺舌頭密接上齦如發ナ行音之時而出音於鼻

以呂波歌圖

東文之用字母也、或用眞體、或用草體、時或併用眞草兩體、其用法皆

相同。但輓近所著之書、多用草體、故學者宜與眞體共熟記之也。

此圖呼法、右側註以眞體、左側註以原字、學者參看以供記誦之便可也。



やまけふこえて
也 末 計 不 已 衣 天

あさきゆめみし
安 左 幾 由 女 美 之

ゑひもせす
恵 比 毛 世 寸

ん
无

第三　靜動不貫句

凡人與物之所作、有不藉他事他物、而獨自動者、謂之不貫句、即如圖中

狗之所作是也。所畫之式、今稱不貫句、其叙法最簡、且東華兩文不甚差異、故先擧之于此、以爲東文讀法入門。

狗走る。

イヌ ハシル

誦法

此東文之所異於華文、惟有動字下附る字母而已。故按字義讀之、則文意已可解、然東文於此る字、猶有緊要之意、讀者須留意焉。

抑東語之動字、一語中有變類不變類、變類謂之語尾、不變類謂之語

幹、語幹者、表語之本義、語尾者、常隨用處而變其形、以表所作之時、與文意之斷續等。語尾變化之處、在東文爲甚緊要之類、故當用華字也、必以字母附于其語尾、爲例、故此文動字下有る字也。

凡動字語、以五十音中ウ韻字母爲語尾者、皆表其語之爲當時目前之所作與爲文意之盡頭也。る者、屬ウ韻、故應知此文爲目睹圖如中事件、而直叙之者、以顯狗在目前走之意。

讀者、若由以上所說、而既能領會例文、則以下所擧之東文、不待指授而一讀之、即可得其解焉。

讀習文

人、立つ。　我、步く。　彼、來る。　彼、往く。

男、怒る。　女、笑ふ。　僕、病む。　疾、癒ゆ。

夜、明く。　日、暮る。　雨、降る。　風、吹く。

老人、悲む。　少年、喜ぶ。　小兒、啼く。

軍隊、進行す。　敵兵、退却す。　知識、開く。

學術、進む。

第四　靜繫靜不貫句

茲有與靜動不貫句相似者、而專寫人與物之形狀態度。今稱之靜繫靜不貫句、其文尾、因語言之變異、有數種、擧隅於左。

水、清し。（ミヅキヨ）

月、明かなり。（ツキアキラ）

賦性(フセイ)、快活(カイカツ)なり。

衆論(シューロン)、囂々(ゴーゴー)たり。

此式、東文之與華文異者、在文尾有しなりたり等之字母。然皆爲前章所謂語尾變化附之耳。如其文意、悉寓華字中、故學者、若急於解文意、則直可以此等字母看做一種虛辭、直讀過華字可也。然苟欲精求東文者、亦不可附之忽畧。故今摘出繫靜字數種、而示其概要、學者宜留意焉。

第一種 强し。弱し。堅し。高し。遠し。黑し。赤し。甘し。苦し。

第二種 軟かなり。鮮かなり。速かなり。

緩かなり。　健かなり。等

以上二種、用國訓者。

第三種　判然たり。　欣然たり。　灼然たり。

確乎たり。　嶷乎たり。　斷々乎たり。

怡々たり。　洋々たり。　綽々たり。等

第四種　美麗なり。　愉快なり。　清潔なり。等

以上二種、以華音而讀之者。

第五　施受動相貫句

前章、論靜不貫句、今又有施受動相貫句、即與前文不同、必藉他事他物

而爲之貫動、如圖中少女之所作是也。此文亦假稱貫動句、舉隅如左。

少女猫兒を抱く。
ショージョ ビョージ イダ

凡人物與其動作相合而成事、其事之所起者、謂之主施。其事之所落者、謂之主受。如文中所言少女、爲主施。「猫兒を抱く」爲動作類。猫兒爲主受。

試於相貫句叙法、嘗對照兩文、則動類中見主受與動字之次序相轉倒、是兩文之所大異最宜注目。

自華文、視東文、則主施與動字之位置全反如此。故華人欲讀此等東文其容易解法、則莫如以主受字下之を字、做上下反讀之符號、反轉讀之如左。

少女猫兒ヲ抱ク

レ反讀符也

讀習句

字を書く。　書を讀む。　文を作る。
月を觀る。　花を賞す。　杯を把る。
水を汲む。　飯を炊く。　湯を沸す。
農夫、鋤を把る。　樵夫、木を斫る。
漁父、魚を漁る。　匠人、器を造る。
商人、物品を商ふ。　官吏、事を執る。
教師、子弟を教ふ。　子弟、學術を修む。
議官、政務を議す。　學士、學理を論ず。

第六　施受動不貫句

人與物之所作中、有行於他人他物者、如圖中騎兵之所作是也。此叙法、以華文常多置於于等助辭於他人他物、今稱之不貫動句、其例如左。

騎兵(キヘイ)馬(ウマ)に乘(ノ)る。

如圖中事件、在華文、常用在字於字等助語辭於主受字上、即曉焉。而在東文必用に字於主受字下、爲例、而動類中、主受與動字之位置相反轉、與前詳貫動句同然、其に字與於在等字其義相同、故文意亦甚易解。今對比兩文之異同、如左。

騎兵（主施）　馬（主受）　に　乘る（動作類）

騎兵　乘　於　馬（主受）

反讀法

騎兵馬ニ乘ル

讀習句

卓に凭る。　倚子に坐す。　杖に仗る。

船に乘る。　車に上る。　轎に駕る。
山に登る。　海に入る。　谷に下る。
月に吟ず。　花に醉ふ。　雪に烹る。
魚、淵に躍る。　鳥、空に翔る。
獸、山野に走る。　蟲、叢間に鳴く。
樵夫、林に入る。　學生、學校に登る。

第七　一施兩受致動句

凡於文中有兩個主受字者、若叙其事、或以甲主受先之、或以乙主受先之、自爲甲乙二式、今先擧甲式之例。

美人(ビジンカメ)、瓶に花(ハナ)を挿(サ)す。

是先瓶於花也。今對比兩文而示異同如左。

美人	主施	瓶に	甲主受
		花を	乙主受
		挿す	動作類
美人		挿	乙主受
		花	甲主受
		於瓶	

反讀法

美人瓶ニ花ヲ挿ス

讀習句

泉に、口を嗽ぐ。　流に、足を濯ふ。

船に、貨物を載す。　車に、米を積む。

嚢中に、貨幣を納む。　卓上に、書册を置く。

家婢、主公に茶を羞む。

園丁、花木に水を浣ぐ。

臣民、國家に身命を致す。

子女、父母に孝養を盡す。

乙式文例

美人、花を瓶に挿す。

是先花於瓶也。兩文之異同左如。

反讀法

此式之讀法、比前者稍覺複雜、故別以數字爲符號、學者宜讀自一頷至于二、再頷至于三則其意可會。

美人花ヲ瓶ニ挿ス

讀習句

富者、衣食を窮民に施す。

識者、憂患を未發に察す。

政府、良政を天下に行ふ。

國民、賦稅を政府に納む。

良藥、口に苦く、忠言、耳に逆ふ。

世界を、方外に擲ち、須彌を芥子に納む。

第八　靜以靜致動句

凡所作中、有必要器具材用者、如圖中竹工之所作是也。此文、謂靜以靜致動句、其如例左。

竹工(チクコー)、竹(タケ)を以(モッ)て櫈(コシカケ)を造(ツク)る。

此式、兩文之比較、左如。

竹工	主施	竹を以て	主受
		欅を造る	主受
竹工	主受	以竹	主受
		造欅	主受

動作類

反讀法

竹工竹ヲ以テ欅ヲ造ル

讀習句

竹を以て、籃を作る。木を以て、匣を造る。

紙を以て、花を作る。土を以て、土偶を作る。
鍛工、鋼を以て、刀を製す。
陶工、泥を以て、皿を造る。
農夫、鋤を以て、田を耕す。
匠人、鑿を以て、孔を穿つ。
獵夫、銃を以て、獸を射る。

東文、時有不用を以て、而代之以にて、如左句。

竹にて、檻を作る。　鋼にて、刀を鍛ふ。
繭にて絹を織る。　楮皮にて紙を漉く。

電氣にて音信を通ず。汽力にて機關を轉ず。
鐵路にて貨物を運ぶ。汽船にて大洋を航す。
管にて、天を窺ひ、錐にて、地を刺す。
玉にて鳥を擊ち、香にて、飯を爨く。
人、三寸の舌にて、五尺の身を破る。

第九　靜同靜致動句

所作中、有兩靜共者、如圖中老爺少女之所作是也。華文、常用與字、故稱靜同靜句、但因主受位置之異、爲甲乙二式、先示甲例如左。

老人（ロージン）、少女（ショージョ）と月（ツキ）を觀（ミ）る。

此式、係老人爲主施而少女在主受者。ニ者、與華文之與字同義、今對比兩文、則有異同如左。

老人	主施	少女と月を觀る	主受	動作類
老人		與少女觀月	主受	主受

反讀法

老人、少女ト月ヲ觀ル

讀習句

兒童、狗と戲る。　某、弟と學校に登る。

彼、父と歩く。　我軍、敵兵と衝突す。

君子、小人と道を異にす。

賢王、民と樂を同くす。

堯舜、人と同じ。　實、華と違ふ。

乙式文例

老人と少女と、月を觀る

此式、係老人少女共爲主施者也。東文、主施下之二と字合之、與華之與字同義、對比兩文而示其異同。

主施　主施　動作類

老人と少女と　月を觀る

老人與少女　觀月

主受　主受

反讀法

老人ト少女ト、月ヲ觀ル

讀習句

天と水と、接す。　月と鼈と、相異なり。

虎と貓と、形相似たり。

君子と、小人と、其行殊なり。

忠と孝と、其理同じ。

上下と天地と、同流なり。

第十　靜因靜致動句

人之所作、有關乎他之利害者、如華文之「爲君市義」是也。今稱之靜因靜致動句、其文例如左。

臣民(シンミン)、君國(クンコク)のために身命(シンメイ)を忘(ワス)る

於此文「ために」者、與華文之爲字同義也。今比較兩文異同、則如左。

臣民	君國のために身命を忘る
臣民	爲君國忘身命

反讀法

臣民、君國ノ爲ニ身命ヲ忘ル

讀習句

公益のために、財を散ず。

酒色のために、身を過る。
講學のために、日東に遊ぶ。
怠惰のために、家產を蕩盡す。
心眼、誤謬のために闇し。
蘇秦、趙のために合從す。
張儀、秦のために連橫す。

第十一　靜由靜致動句

人與物之所作中、有從他事物出來、若取來者、如華文之「人從日邊來」「鐵自山出」等是也。今稱此叙法、謂靜由靜致動句、其例如左。

大使日東より至る

東文より者、大率與華之從自同義。然より者、又與華之「承恩於君」「弗獲於上」等之於字之義通用。其他猶用法之與華文不同者不少。皆應推從自之義而解焉。此式兩文之對照如左。

大使	日東	より	至る
大使	自	日東	至

反讀法

大使、日東ヨリ至ル

讀習句

珠玉、琨岡より出づ。　大象、印度より來る。

漆液、漆樹より生ず。　理學、宋儒より起る。

佛教、漢時より行はる。

功臣、朝庭より爵位を賜はる。

政府、人民より、賦税を徵收す。

九層の臺は、累土より起り、千里の行は、足下より始まる。

第十二　靜受靜致動句

人與物之作動中、有非由自己之意而作動、受他之作動而作動者。如圖中稚兒之所作是也。此等叙法、於華文者、常用被所見等之字、故今稱靜受靜致動句、其例如左。

稚兒(チジヽ)、母に抱(イダ)かる。

此式、母者主動之靜而、稚兒者受動之靜、稚兒爲主施而母爲屬體也。今對比兩文之異同如左。

稚兒	母に抱かる
稚兒	被抱於母

東文作用言、抱かる者、其常形抱く之變語尾而成受靜致動形也。即る字母者、與華之被見所等之同義也。

凡作用言、如此變語尾而成受靜致動形也。各因其種類按左列二則中之一者也。

甲則、變語尾之ゥ韻字母、爲ァ韻字母、而後添る者。即如下圖第一類。

乙則、變語尾之ゥ韻字母、爲ェ韻字母、而後加らる者。即如下圖第二類。

第一類	常形	受靜致動形	
抱	く	かる	
造	る	らる	
汲	む	まる	ウ音字母 ア音字母 後動的語尾

第二	常形	受靜致動形
忘	る	れらる
捕	ふ	へらる

類	
製す	製せらる

ス語尾　　ラレ語尾　　被動的語尾

反讀法

稚兒母ニ抱カル

讀習句

官兵、賊ニ襲ハル。

貓兒、狗ニ追ハル。

盜兒、警官ニ捕ヘラル。

囚徒、法官ニ糾治セラル。

人民、政府より賦税を徴收せらる。

法に循ひ、正を守る者、世に侮らる。

第十三　靜使靜致動句

人與物之作動、有靜使靜而爲事者。如圖中少女之所作是也。其叙法、謂之靜使靜致動句、其隅如左。

少女稚兒（ショージョ チジ）を、

果（クダモノ）を採（ト）らしむ。

此文中、作用言採らしむ者、其常形採る之變其語尾而成使靜致動形也。而其しむ、與上之をして二合、而當華之使令敎俾等之義。

凡以作用言、如此變語尾而爲靜使靜致動形也。其法、以しむ、代受靜致動形之るらる而已。

	受靜致動形	靜使靜致動形
第一種	抱かる	抱かしむ
	造らる	造らしむ
	汲まる	汲ましむ
第	忘れらる	忘れしむ

二種	
捕へらる	捕へしむ
製せらる	製せしむ

於此式、兩文之異同如左。

少女	
	稚兒をして
	果を採らしむ

少女	
使	
稚兒	採果

反讀法

少女稚兒ヲシテ(使)果ヲ採ラシム

讀習句

僮僕をして(使)、花に浣がしむ。

婢妾をして、鸚鵡を飼はしむ。

經練、愚をして、能く智ならしむ。

偶然利達の事、愚者をして(使)、智に似せしむ。

善政、人民をして、其生に安ぜしむ。

惡政、老稚をして、溝壑に轉ぜしむ。

齊、萊人をして、兵を以て、定公を劫かさしむ。

鄭人、子濯孺子をして、衛を侵さしむ。

庚之斯をして、之を追はしむ。

第十四　時異句

凡動作、皆有未成、將成、已成、既成、來時、當時、過時、昔時。此法、兩文共具矣。但、東文者、多以語尾之變化、示之。華文者、加助語於作用字上而表之。今稱之謂時異、併擧兩文於左而見其異同。

將に樹を斫らんとす	將斫樹

來時
未成

今	今樹を斫る	今斫樹
既に	樹を斫れり	既斫樹矣
曾て	樹を斫りたりき	曾斫樹矣

當時將成　過時已成　昔時既成

東文作用語尾之變而所表時異之法、按語言之種類而分數種、且各有定則、軼然不可紊。今、詳述於此、仍恐有錯沓難解之憂。惟須看既將今曾等之字、若文尾有んとすたりれりぜりたりき等之字母、即可推知其大意也。

讀習句

人、立てり。　彼、往く。　僕、病めり。

病、癒えんとす。　學術、進歩したり。

彼、曾て、修學の爲に、泰西に遊びたりき。

今、既に、還れり。將に、大に用ひられんとす。（被）

彼、國、既に、大に富めり。方に、今盛に、强兵を勉

む。他日、必ず將に、宇内に雄飛せんとす。桓山の鳥、四子を生めり。羽翼既に成れり。將に四海に分れんとす。

第十五　動致動之句

人與物之作動、有如以上諸式皆單行者、又有二三同時、若相連繼而起者。其叙法、今稱之動致動句、由作動連續之情勢而有數種、今對照兩文而隅擧於左。

走り過ぐ	走過

提へ來る
提　來

歩きつゝ語る
且　歩　且　語

薪を採り　水を汲む
採　薪　汲　水

薪を採り　若くは　水を汲む
採　薪　若　汲　水

善事をし(爲)	て	善報を得
爲 善事	而	得 善報

精を勵し	治を圖り	而して	國を富し	兵を強くす
勵 精	圖 治	而	富 國	強 兵

國を富し	兵を強くし	而して後	事を外に(於)擧ぐ
富 國	強 兵	而 後	擧 事 於 外

既熟讀以上諸隅、比較兩文之辭句、而知以下之東語與華字其意相

同、則動致動句之句、并文、隨見而可解。但東文句々連接之處、其句末皆變イ韻若エ韻之音、學者須注意。

つゝ　且……且……　且つ　且

また　又　あるは　或

若くは　若　或は　或

て　而　而して後　而後

而して　而

第十六　代靜句

代靜字者、謂代一文中重出之名稱而簡其指呼者也。而其中有代人名者、有通人及事物而代其指呼者、今擧東文常用者於左。其中、有以華字

而記者、與以字母而記者。以華字而記者。雖直隨其字義而可解。至以字母而記者。學者宜熟記焉。

人代靜句

われ	余、予、吾、我	用法、如華之 以吾 余今 予當 等。
わが	吾、我、	用法、如華之 吾國 我家 等。
余が 予が		用法、如華之 余之 予之 等。
をのれ	己己、自、	用法、與華同。
なんぢ	汝、爾	用法、與華同。
かれ	彼	用法、如華之 彼曰 彼曾 等。
たれ	誰	用法、與華同。

あるひと　或　用法、同上。

われら　吾等、吾曹　用法、同上。

通代靜句

これ　是、此、之　用法、如華之是也以之等。

この　此、斯、　用法、如華之斯道此人等。

それ　其　用法、如華之君其思之等。

それ　夫　用法、與華同。

その　其　用法、如華之其人其家等。

かれ　彼　用法、如華之彼與是從彼等。

かの　彼　用法、如華之彼山彼樹等。

かの　夫　用法、與華同。

こゝに　于茲　用法、同上。

いづれ　孰　用法、同上。

なに　何　用法、同上。

これら　是等　用法、同上。

かれら　彼等　用法、同上。

第十七　繫靜句

凡人及事物之名稱者、除特稱一人一事一物之外、皆爲一名而通一群一類者、故非添加他辭句而表別之、則不能明確其義、今稱其所添加之

辭句、謂繫靜字。繫靜言者、別靜字之屬與形勢也。種隅舉於左。

甲式　以所有者、所屬者、所在地等之名稱者、皆屬之。

林氏の園地
林氏之園地

製艦の材料
製艦之材料

東洋の富士峯
東洋之富士峯

汝の家產
汝之家產

瀛車の鐵軌
瀛車之鐵軌

中國の廣河
中國之廣河

乙式　以人及事物之作用者、皆屬之。

清き水
清水

明かなる月
明月

確乎たる議論
確乎議論

走る狗
走狗

高き山
高山

快活なる賦性
快活之賦性

綽々たる態度
綽々態度

退却する兵
退却兵

貓兒を抱く少女
抱貓兒之少女

窮民を濟ふ富者
濟窮民之富者

月を觀る人
觀月人

賦稅を納むる國民
納賦稅之國民

母に抱かるゝ稚兒
被母抱稚兒

稚兒をして果を採らしむる少女
使稚兒採果之少女

將に	樹を斫らんとする	人
將	斫樹 之	人
既に	樹を斫りたる	人
既	斫樹 之	人
曾て	樹を斫りたりし	人
曾	斫樹 之	人

學者、熟視以上之諸例、應知以上諸文、爲繫靜句而連接名稱、則必皆其作用語尾、即如第四繫靜句中第一種者、レ變キ、其第二種第三種者、リ變ル、於第十四時異句之昔時者、キ變シ、其他者卒皆、着地、若

別添ル而連接于名稱、且特要留意者。凡繫靜句之語尾、以んとする而成者、爲來時未成之意、以たりし而成者爲昔時既成之意。

第十八　輔動句

作用言之意義、亦如名稱、甚廣濶。故非以他辭句、修補裝添之、則不能盡其文意。今稱其辭句謂輔動言、而從其助動之旨分爲數類。

甲類　屬之者、皆辭句簡單而且其意義與次序、兩文共畧相同、故由語尾之有無同異、而分其類、每類各擧其四以爲之隅。

凡。猶。甚。唯。等

大凡。大抵。大率。一旦。等

以上、無語尾者。

遠く。高く。早く。強く。等
恰も。苟も。最も。尤も。等
即ち。忽ち。強ち。倏ち。等
誠に。正に。大に。更に。等
益々。增々。愈々。各々。等
希くは。翼くは。惜らくは。願くは。等
動すれば。例へば。譬へば。惟みれば。等
若し。儻し。如し。但し。等
惡ぞ。何ぞ。如何して。等

以上、有語尾者。

もし若。　たとひ例、令。　つひに遂。　ともに共、俱。

すべて都、總。　また又。　一たび一。　あるは或。

以上、常多以字母記者。

乙類　屬之者、皆係熟字連字等。

莞爾として。　欣然として。

忽焉として。　煥乎として。

怡々として。　齷齪として。

寂寞として。　自然に。　漸次に。

激烈に。　同時に。等

丙類　以時期、狀別者屬之。

これより先	先是
今より後	自今後
爾りしより以來	自爾以來
こゝに於て	於是
この時に當て	當此時
進行する時に	進行之時
退却の際に於て	於退却之際而

危難の間に在りて
在危難之間而

衰頽の極に達する今日に及んで
及達衰頽極之今日而

國勢回復の機運に臨んで
臨國勢回復之機運而

丁類　以作用之原因由緣、狀別者皆屬之。

これに由て	由之
これを以て	以是
さるは	然者
されば	然則
兒孫の爲めに	爲兒孫
遠く慮る	遠慮
兒孫を慮るが爲めに	心を盡す

爲慮兒孫　盡心

古の道に由て　今の俗を變ず

由古之道　變今之俗

小學の成功に因て　大學の明法を著す

因小學之成功　著大學之明法

上下相親むがゆゑに　政令能く行はる

上下相親之故政令能行

第十九　斷定句

凡人、對一人、則察其賢愚、分其妍醜、視其行止。見一物、則明其精麤、辨其好惡、尋其出處來源。遇一事、則原其起因、推其成否、究其利害與得失。或以可定之、或以否定之、或以推斷之者。是爲常矣、而叙之以文也、雖從其事情而種々異其樣式、今概稱之謂斷定句。但欲盡擧之則頗不堪其煩、故今唯摘出常以字母所記之語辭者也。學者宜倣以上之例、而比較兩文、以領會東文辭句、且記得以字母所記之東語。

仁は　人の　安宅　なり

仁者　人之安宅也

は、者也。指別事物之辭、華文多省之。然東文不省爲常。なり、也也。斷定事物之辭。

規矩は　方圓の　至れるものなり

規矩者　方圓之至者也

もの、者也。汎稱事物之辭。

富と貴とは　人の　欲するところなり

富與貴者　人之所欲也

黑夜行ふところの事	必青天白日の下に顯はる
黑夜所行之事	必顯於青天白日之下

ところ、所也。汎稱事物之情景之辭。

孝とは	善く父母に事ふることなり
孝云者	善事父母也

とは、云者。華文多省云字。

こと、事也。華文不用之。東文常置之於一事物作用之占主施若主受之位置者之末尾、以示其作用言之變成名稱狀者也。

衆は　衆人をいふ
衆者　謂　衆人

仁は　仁者をいふ
仁者　謂　仁者

博く　愛する　之を仁といひ　行ひて之を宜する
博　愛　之謂　仁　行　而　宜　之

之を義といふ
之　謂　義

いふ、謂也。いひ者、其連續于下之形也。
と者、提示事物之辭也。

寡人の國に於けるや
寡人之於國也

心を盡すのみ
盡心焉耳矣

亂臣割居して四分五烈す
亂臣割居而四分五烈是

是之を伐んのみ
伐之而已也

のみ、耳而已也。

師は
師者

道を傳へ業を授くる所以なり
所以傳道授業也

天は　天者

萬物に於て　最も　大なりとなす

於　萬物　爲　最　大

禮の用は　禮之用者

和を　貴となし　先王の道は　之を

和　爲　貴　先王之道者　之

善と爲す

爲　善

なす、爲也。なし者、其連續于下之形也。

仁の器たること

重く　その道たること　遠し

仁之爲器

重　其爲道　遠

仁と義とは　仁與義者

定名たり　爲定名

道と德とは　道與德者

虛位たり　爲虛位

たり、爲也。たる者、其連續名稱之形也。

孔子　孔子

委吏となり　爲委吏

司職の吏となる　爲司職吏

なる、爲也。なり、其連續于下之形也。

德の輶きこと

毛のごとし

德之輶	如毛

王言は	絲のごとし
王言者	如絲

その出ること	綸のごとし
其出	如綸

ごとし、如也。ごとく者、其連續于下之形也。

山には	草木禽獸あり
於山者	有草木禽獸

山には、於山者也。

梁に嘯くもの あり 從て 之を燭すに 見ることなし

有 嘯於梁 者 從而 燭 之 無 見

聲と形と あるものは

有 聲與形 者

人獸これ なり

人獸 是 也

聲と形と なきものは

無 聲與形 者

鬼神これ なり

鬼神 是 也

鬼は 聲なく 形なく 氣なし

鬼者 無聲無形無氣

魑魅罔兩 魑魅罔兩

能く逢ふことなし 莫能逢

あり、有也。ある者其繫靜也。

なし、無也。莫也。なき者、其繫靜而なく者其輔動也。

權綱 權綱

已に在りて下に在るは 在已而在下者

敢て之を干すことなし

莫敢干之

にあり、在也。ある者、其繫靜也。

地方百里にして以て王たるべし

地方百里而可以爲王

泰伯は至德といふべきものなり

泰伯者可謂至德者也

宜しく以て南面して秦を制すべし

宜　以　南面　而制　秦

其　當に去るべきところを去る

去　其　所　當　去

學者　須らく千古の隻眼を具へて之を看るべし

學者　須　具　千古之隻眼　而看　之

べし、可也、宜也、須也。當也。べき者、其繫辭形也。而べく者、其繫動

形也。

關雎は樂みて淫せず哀みて傷せず

關雎者樂而不淫哀而不傷

人の己を知らざるを患ひず

不患人之不己知

睡狐は雙禽を得る能はず

睡狐者不能得雙禽

一事をも爲さゞるは惡事を爲すに均し

不爲一事者均爲惡事

ず、不也。ざる者、其繫辭形也。

獨賢者にこの心あるのみにあらず人皆之あり

非獨賢者有是心而已人皆有之

矢　矢

非不銛　銛らざるにあらずして劍　而劍

非不利　利ならざるにあらざるなり　也

にあらず、非也。にあらざる者、其繫辭形也。

不仁者は

以て久しく約に處るべからず

不仁者者 不可以久處約

民は民者可使由之 これに由らしむべし

不可使知之 之に知らしむべからず

利器を以て小兒に托すべからず

不可以利器托小兒

べからず、不可也。

士は 以て 弘毅ならずんばあるべからず

士者 不可以不弘毅

ずんばあるべからず、不可不也。

治を願ふの君 願治之君

以て之を考ふることなくんばあるべからず 不可以莫考之

なくんばあるべからず、不可莫也。

天下の治 天下之治

勞せずして致すべし 可不勞而致

彼　其民の時を奪ひて　耕耨して以て
彼　奪其民之時　而使不得耕耨　而以

其父母を養ふことを得ざらしむ
養　其父母　事

ざらしむ、使不也。

不好犯上事　上を犯すことを好まずして　而好作亂　亂を作す

ことを好むもの未だ之あらず

事者未之有

未だ……あらず、者未……有之意也。

たゞ之を其口に(於)擧ぐるのみならず

不惟擧之於其口而已也

して之を其書に筆す

而筆之於其書

たゞ……のみならず者、不啻、不惟等之意也。

園を視れば園丁を知る

視園則知園丁

ば、則也。

人人

既に此世に生れたればたゞ當に此世の人となるべし

既生此世則但當爲此世之人

たれば者、既……則之意也。

孫叔敖

孫叔敖

嬰兒なりし時出遊して兩頭の蛇を見

爲嬰兒之時出遊而見兩頭蛇

しかば殺して之を埋めたりき

則殺而埋之

し者、示事之既然之辭。

しかば、以既然之事實而接下句之辭。

たりき、斷定既然作動之辭。

天下道あるときは見はれ道なきときは隱る

天下有道則見無道則隱

ときは、則也。東語原義於時者之意也。

終を慎み遠きを追はゞ民の德厚きに歸せん

慎終追遠則民之德歸厚

ば、則也。追はゞ者、若追則之意也。
ん、將也、歸せん者將歸之意也。

君子もし民を化し俗を成さんと
君子如欲化民成俗

欲せばそれ必學に由らん
欲則其必由學

聖人死せずんば大盜止まじ

聖人不死則大盜不止

ずんば者、若……則之意也。

じ者、可不之意也。

百畝の田　其時を奪ふことなくんば

百畝之田　勿奪其時事則

八口の家　以て飢ることなかるべし

八口之家　可以無飢事

なくんば者、若無……則之意也。

なかるべし者、可或有之意也。

滄浪の水清まば以て吾纓を濯ふべく
滄浪之水清則可以濯吾纓

濁らば以て吾足を洗ふべし
濁則可以洗吾足

以て仕ふくべんば仕へ以て止むべくんば止む
可以仕則仕可以止

べくんば者、若可……則之意。

眼能く萬物を見れども自ら見る能はず

眼能　見　萬物　而　不能　自見

吾曹國恩を荷へり力微なりといへども

吾曹　荷　國恩　雖　力　微　也

當に其難に死すべし

當　死　其難

といへども、雖也。以當時之作用接反意之下句之辭。

荷へり者、既荷之意也。

舊より吾帝の名を聞きしかども其實を知らず

舊　聞吾帝之名　而不知其實

しかども、以過去之事實而接反意之下句之辭也。

吾　たとひ生きて人に益なしとも

吾　縱生而無益於人

吾　以て死して人に害あるべけんや

吾　可以死而有害於人

とも者、假令雖……之意。

べけんや者、何可……之意。

借債を生ぜんより（與）は寧晩食を喫せずに

與生借債　寧不如不喫晩食

して睡に就くに如かず

而就睡

仁は人を愛するより（乎）大なるはなく

仁者莫大乎愛人

智は　賢の賢を知るより大なるはなし
智者　莫大乎知賢之賢

より者、比較事物之辭。

管仲すら猶召すべからずしかるを
管仲且猶不可召而

況んや管仲たらざるものをや
況不爲管仲者乎

すら、且猶也。

この故に	人を爵するに	必ず	朝に於てするは	
是故	爵人	必於朝		者

衆と	これを共に	すれば	なり	
與衆共之			故	也

すればなり、爲之故也之意也。

第二十　疑問句

凡人思想中、對自信而斷定者、而猶有觀察事物疑之而不能自決者、此文從其事情之異而爲各種樣式、猶於斷定式。今亦概稱之謂疑問句。玆摘其可爲讀法之模範者而已。

心を動かさゞるに道ありや
不動心　有道乎

や、乎也、哉也。

仲由は政に從はしむべきか
仲由者　可使從政也歟

か、歟、乎也。

子奚ぞ政を爲さゞる
子奚不爲政

奚ぞ……さゞる、二合疑問之辭也。

弟子　弟子

孰れをか學を好むと爲す

孰　乎　爲　好　學

孰れをか、以誰人乎之意。

其前に譽あると　其後に毀なきと

與其有譽於前　孰若無毀於其後

いづれぞや

いづれぞや、孰乎也。

其奥に媚びん	與
よりは（與）	其媚於奥
寧ろ	則
竈に媚び	寧
媚於竈	

よとは	何の謂ぞや
云者	何謂也

よりは、與也。捨彼取是之辭。

よ、命令之辭。

ぞや、疑問之辭。

如何せば　これを養ふといふべけん

如何　則　可謂斯養

べけん、疑可之辭。

如何せば、如之何則之意。

死者に比して　一たび之に洒がんには

比　死者　而　一　回　洒　之　則

之を如何せば　可ならん

如之何　則　可

洒がんには、將洒則之意。

可ならん、疑可之辭。

君子の言　かくの如し　豈　愷々たらざらんや
君子之言　如　此　豈　不　愷々　乎

かくの如し、如此、若此也。

彼　惡んぞ　敢て　我に當らんや
彼　惡　敢　當　我　哉

第二十一　希望句

凡文、有不如前章諸式述其所思、對他而希望之、要求之者、其文是謂希望句、擧數隅於左。

願くは子の志を聞かん

願　聞　子之志

聞かん、欲聞也。

願くは善に伐ることなく勞を

願　無伐善　無施

施ることなからん

勞

なからん、欲無也。

爾	尚くは	予一人を	弼けて	永く	四海を清めよ
爾	尚	弼 予一人		而永	清 四 海

清めよ、須清也。よ者、命令之辭。

庶くは		其美を殞さざるに		幾からん
庶	幾 不	殞 其美		

幾からん、將近之意。

庶幾くは		其美を殞さざらん		ことを
庶幾	不	殞 其美		事

殞さざらん、將不殞之意。

己に如ざる者を友とするなかれ

無友不如己者

過ては改むるに憚るなかれ

過則勿憚改

なかれ、勿莫無也、禁事之辭。

第二十二　感歎句

人、有對事物而或咏歎、或愛惜、或悲哀、或驚駭、謂之感歎句。擧數隅於左。

管仲の器小なるかな

管仲之器小哉

かな、哉也、乎也。

美なるかな水の洋々乎たる丘が濟らざるは

美哉水洋々乎丘之不濟者

これ命なるかな

此命

大なるかな死や君子も

大哉死哉君子亦

これに息し小人も

息焉小人亦

これに休す
休焉

も者亦也。

惜いかな吾その進むを見て未だ其
惜哉吾見其進而未見

止まるを見ず
其止

嗚呼曾て泰山は林放に如かざる

嗚呼曾謂泰山不如林放
ことを謂ひしか
乎

噫斗筲の人何ぞ算ふるに足らんや
噫斗筲之人何足算也

第二十三　兩文語辭比較圖說

凡東文之多用字母而記者、爲動字語尾、與助語辭、而語尾者、雖不解其義、亦不甚害於文意、而如助辭則不然。故今別製一表、而對照兩文之語辭。學者、儻與以上各章所註之語辭、相參互考、則獲益良多矣。